

# 山の本を楽しむ

藤井 諭

広く一般者にも有名な井上靖の「氷壁」（新潮文庫）を楽しんだ。特に山へ登る人は誰も、その舞台となった徳沢小屋（現徳澤園）に憧れると思う。この小説がどんな内容だったかをより詳しく知っておくと、穂高連峰への興味もより深くなるだろう。

## 第4回 井上靖著「氷壁」

### 【概要】

前穂高の難所に挑んだ小坂乙彦は、切れる筈のないザイルが切れて墜死する。小坂と同行し、遭難の真因をつきとめようとする魚津恭太は、自殺説も含め数々の憶測と戦いながら、小坂の恋人であった人妻の八代美那子への思慕を胸に、死の単独行を開始する。

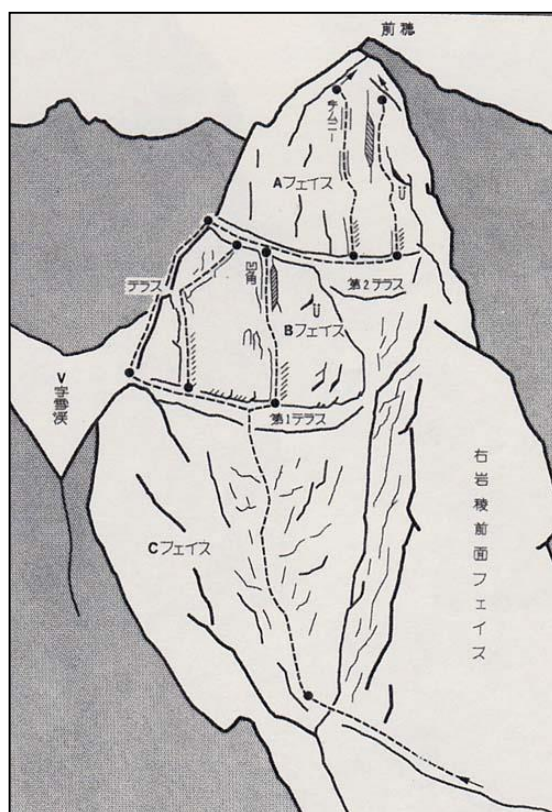
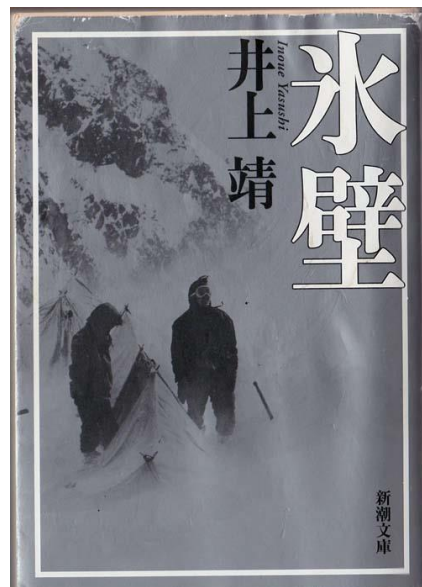
### 【内容のポイントと感想】

魚津恭太は商事会社社員で、その上司は支社長の常磐大作である。八代教之助はナイロン会社の重役を勤めるエンジニアで、その若き妻が八代美那子である。魚津の山仲間の小坂乙彦は出版社に勤務、八代美那子と関係を持ったことがある。

魚津と小坂は暮れの28日夜に新宿駅を出発、松本から沢渡、釜トンネル、河童橋をへて徳沢小屋へ入る。そして中畠新道から奥又白、前穂東壁CフェイスからAフェイス（150m 大岩壁）を経て前穂頂上のルートを目指した。しかしAフェイス上部で吹雪のためビバークする。翌日は小坂がトップで出発、突然小坂が滑落し視界から消えた。魚津が手繰り寄せたザイルは擦り切れたように切断されていた。すぐに捜索隊が出たが深雪に阻まれ、遺体は雪融けまで残された。下図は小森康行著「日本の岩場」（東京新聞出版局）から引用した岩登りのルート図である。この図の前穂直下でビバークし、翌朝に事故が起こり、小坂はCフェイスのさらに下まで一気に落ちたことになる。

魚津は小坂の妹、かおるに案内されて酒田の実家を訪れ、小坂の母に詫びた。この事故は新聞に大きく報道されて、当時の最新技術によるナイロンザイルが切れたことが社会的な話題となった。扱い方に問題があった、自殺をした、さらには故意に切られた、と疑う記事も出た。

魚津は新聞に手記を発表し、ナイロンザイルが切れたことを主張したが、製造元の佐倉精工にとってそれは死活問題であった。そこでナイロンザイルの切断実験が、優秀なエンジニアでもある八代教之助に依頼されて行われた。従来の麻ザイルとの比較実験として2ヶ月の準備を経て行われた。55キロの落下物を結びつけ、高さ10mで落とし花崗岩のエッジで止める実験だった。ナイロンザイルは8ミリと11ミリ、エッジは45度と90度だった。実験でナイロンはいずれも切れなかった。これによりその安全性が評価されたのに反し、魚津の立場は極めて悪くなった。この間の八代美那子とのやり取り



の中で、魚津は彼女の魅力に取り付かれてしまうようになった。

5月になり雪解けと共に小坂乙彦の遺体の再捜索が始まった。魚津はかおると共に徳沢小屋に入った。その時の一節である。

かおるはそう言うと、こんどは先に立って歩き出した。徳沢小屋の二階建ての建物が樹間から懐かしく魚津の視野にはいつて来たときは六時だった。建物の前の広場は、隅の方だけにどこどころに雪が置かれてあったが、建物を取り巻く樹木はいずれも青い葉を繁らせていた。小坂の事故の直後、ここで過ごした何日かの苦しさが、魚津の心に思い出されて来た。こやみなく空間を埋めていた小さい雪片。風の唸り。そしてきしむように流れていた重く暗い時間。—しかし、そうしたものは、現在の徳沢小屋は全く無関係に見えた。小屋は五月の白い夕暮の中にただ静かに置かれてあった。

捜索隊により小坂の遺体はB沢の上部で発見された。ザイルは体に付いており、その切れ端は保管された。遺体は小屋の近くの広場で、山の歌の合唱とともに茶毘に付された。常磐は小坂のザイルの切れ端の再鑑定を八代教之助に求めたが拒否され、魚津の立場はさらに悪くなった。

傷心した魚津は将来一緒になることを心に決めたかおるを誘い、穂高に登ることにした。飛騨側から滝谷を穂高岳へ登り、かおるの待つ徳沢小屋へ降りる計画とした。そして7月10日に東京駅をかおるに送られ13日に徳沢小屋で再開する約束をして出発した。魚津は高山から新穂高温泉を経て滝谷に入った。D沢に入るとガスに覆われ、落石の音が絶え間なく続いた。やがて20メートル程先で岩が沢に突き当たる音がし、これ以上進んでは危ないと思った。その時の一節である。

ガスの流れの中に魚津は立ちつくしている。後方には八代美那子がいる。前方にはかおるがいる。そう魚津は思った。自分がかおるのところへ行かなければならぬ。美那子の幻影を払いすてるために、自分はこの困難な危険の多い山行きを思い立ったのではないか。それに後退しようと、前進しようと、落石の危険は同じことである。魚津は鼻をくんくんさせた。この時気付いたのだが、ガスの中を硝煙臭い匂いが流れている。大きい山崩れのあと、その地帯に長いこと匂っているあの一種独特な焦げ臭い臭気である。魚津は再び向きを変えて、前へ歩き出した。かおるが待っている。かおるのところへ一刻も早く行ってやらねばならぬ。

かおるは一人で徳沢小屋に入り、魚津の下山を待った。遅いのに待ちきれず、一人で涸沢をヒュッテまで登った。しかし小屋番から魚津は見えていないと聞き、さらに穂高岳山荘まで登った。ここで初めて魚津に何かあったことが発覚し救助隊が向かった。魚津の遺体には死の直前のなまなましい手記が残されていた。

葬儀を終えて後片付けをしながら、かおるにはまだしなければならない仕事があった。一度穂高へ登り、デュブラの詩にあるように、美しいフェイスを探しそこへ小さなケルンを作り、その上に魚津と兄の二本のピッケルを差し込むために。

写真  
写真は奥又白池から望む前穂高岳である。紅葉の頃は特に美しいが、ここへ至る道は熟達者向きであり徳沢園で聞いた上で登ると良い。岩登りが好きなわけではないが、「氷壁」の舞台として一度は訪れて見たい場所である。  
(つづく)

